

『剣道と共に…』

岡山県

養徳館道場

中学3年 山崎純汰

中学校生活も残りわずかになり、僕の剣道と共に歩んできた七年間を振り返った。警察官になりたいという思いから剣道に興味を持ち、初めて道場へ行ったのは小学二年生の時だった。その時目に入ってきたのは、先輩方の激しい稽古と、先生の大喝だった。僕は思わず恐怖を覚えた。見知らぬ同級生達は、巧みに竹刀を振りもくもくと稽古をしていた。その光景が、今でも鮮明に脳裏に残っている。自分が出遅れたな。同じ様に出来る様になるのかと思った。

あの日から七年間、夏の暑い日も冬の寒い日も、熱があり体調の悪い日も、チームのみんなに迷惑はかけたくない一心で竹刀を振った。相変らず先生の大喝は、日々飛び交っていたが、いつか見た、あの激しい稽古の中にいつのまにか自分もとけこみ、そこが自分の大切な居場所になっていた。

中学校に入って剣道部に所属し、初めて剣道の目標ができた。それまでも目標は立てていても、ぼんやりとしたものであったが、明確に全中へ出場したいという思いを強く胸に抱く様になっていた。

僕にとって今までで最も熱い中学校生活最後の夏。ついに全中行き切符を手にする事が出来た。目標を達成できた瞬間の喜びは、今までに感じた事のない喜びで、涙が自然に溢れ、共に戦ってくれた四人の仲間に対する感謝の気持ちでいっぱいになった。

先生から教えられた言葉の中で「努力に勝る天才なし。継続は力なり。日々努力」という言葉がある。“努力”と一言で言っても人それぞれに努力の仕方や方向性に違いはあると思う。僕にとって努力とは「何か特別なプランを立て実行するのではなく、簡単な取り組みでもピラミッドの様に高く、日々積み重ねて行く事」だと気がついた。簡単な取り組みほど、つい手を抜いたり、疎そかにしてしまいがちになる。だけどこれからも決して忘れてはいけないことだと思う。

また「恩送り」という言葉も先生から教えていただいた。「恩返し」という言葉は知っていたが、「恩送り」は今まで聞いた事のない言葉だった。そこで自分なりに「恩を送る」ということについて考えてみた。

仕事で疲れている中、僕達のために、日々稽古に来て下さる先生方には、感謝の気持ちでいっぱい、他には言葉が見つからない。僕は、先生方にどの様に恩返しができるのかと考えていたが「恩送り」と言う言葉を教えていただいてからは恩は先生にたとえ返せなくても先生から教わったことを後輩たちに伝えることが恩を送るということなのかもしれないと考える様になった。稽古の時、「小学生の相手になって」と先生から言われる事がある。

その時には僕が先生から教わった事を思い出し、微力だけど後輩に同じように伝え続けていく事で、自分自身も初心に戻れ、先生から受けた教えを守っていくことが「恩送り」になっていくのだと思う。

道場へ通った七年間は、苦しい事の連続だったが、耐え抜きやりきった自分自身がそこにいたと今は自信をもって言える。

高校生になっても、「努力に勝る天才はなし」「恩送り」この言葉を忘れず心に留め、新たな目標に向かって努力して行きたいと思う。